

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑草
Author(s)	荒巻, 昌之
Citation	龍南會雜誌, 171: 75-78
Issue date	1919-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6559
Right	

われも又 月はのぼれり

六月の静かなる夜の色は

音もなくせまり來りぬ

離愁に濡れし瞳もて

宵々毎に月を戀ふ

さらばさらば やさしの花よ

いまさらに涙流るゝ

雑 草

一、三、兩 荒 卷 昌 之

一、懐しき龍南を去るの日

幾多の期待と憧憬さを持つて這入つた龍南三年の生活も不幸最後の
一學期中一日の出席だにすることに能はずして終つてしまつた、曾て
は肉体的強者を以て他人も許し自からも許せし身の今は病後憔悴の
身をかこちつゝ、龍南の地を去るのであつた。

思へば誠に思出多き龍南なる哉、生氣に溢れ希望に満ちた青年時代の
生活の跡一本一草の端にも消し難い印象が残つてゐる、住めば都
何人かその地を賞せざらん何人かその母校を愛せざらん、予も亦五
高の愛仰者であり龍南の讚美者である。予は今この龍南を去るので

ある、予と雖もまた感なき能はず拙なき句を聯れて別れの辭とする。

尙三歳の春秋懇切なる御教導を垂れ給ひし諸先生方に一言の御禮を

も申し述べずして歸りし不敬の罪を謝し併せて出發の當日多忙中懇

々遠路見送り下されし多數の諸兄に對し心からの感謝の辭を呈する

(大正八年五月三十日)

仕度終へ静けき寮にひとりをれば胸せまり來てうつ

むかれぬる。

如何ならん氣持かすると恐れてし別れ去る日の今日

は來にけり。

思ひ出のいとも多かる龍南を兎も角吾は今別れ行く

われひとり試験も受けず歸る日は幾度か校舎振りか

へり見し。

辛くとも最後の試験受くる友をうらやましくも思ひ

るかな。

悲しくもまた嬉しくもおもほへしこゝらの友に送ら

れし身は

幾度か別れの言葉言ひかはし後は互に帽を振りしか

今一度窓より顔を出せしも影だに見えず親しき友は

あながちに男々しき心振り立てゝ友と別れし後の淋

しき。

懐しき友等の上に幸あれと祈る心も淋しきものか。
三度経し吾が龍南の春秋も淋しき終りつげにけるか
も。

二、病床五十日

心まで衰へ果てにしこの身には友の便りぞ日々待
たる。

若しや今日もしや今日とて今宵まで君の便りを待ち
て暮しつ。

病み床につきて始めて徒然の眞の味を嘗めにけるか
も。

天井の板の筋目も算へけり如何にしてかは今日は暮
さん。

春の日のまたも一日暮れにけり何日になりてか吾は
癒ゆらん。

九時になれば郵便脚夫の来るものを今は空しく十時
になりぬ。

茶話會と友の手紙に聞くよりも病に臥す身はいらだ
ちまざる。

とやこうと茶話會の様偲びつゝ病の床に臥す身淋し
ぬ。

武夫原も深緑にぞ變りけん庭の木の芽も出揃ひけれ
ば。

武夫原に月見草咲く夕暮を思へば神も呪はしきかな
今は早や友の手紙もなくもがなさきだに心せきた
つものを。

春の宴聞くや悲しき病の床。

春の日ののどけくもなし病の床。

病む身には庭の櫻も呪はしき。

寮戀し宵待草も咲きぬらん。

櫻より躑躅散るまで臥せしかな。

三、夜半の默想

若しや吾この身の弱み知るなくばそも如何程に樂し
かるらん

思ふことなる世なりせば吾は先づこの身のあるを忘
れ果てなん

萬能の力の吾にあるならば苦しき過去を忘れ果てな
ん。

永へに眠りにあれと祈るなる眠りの内ぞ人は安けき
現には叶はぬ事も夢路には遂げらるべきぞ夢はうれ
しき。

四、窓の櫻（以下日記の内より）

只二つ咲きし花をば小雀のいぶかりてあり朝日の中に。

わけもなく浮き立つ心つきにけり窓の櫻もほころびゆけば。

昨日一ト日旅せし暇に窓際の櫻の花も咲き揃ひけり窓際の櫻の花を見るよりも故郷の春を戀ひ偲ぶかな花酒に痛めし頭もたぐればまた飲みたくもおもほゆるかな。

夕嵐吹けば名殘の櫻花吹雪の如く室に入りけり、櫻花封じ込めたる吾が手紙中もあらはにかへりけるかも。

主の手に渡りだにせず吾が手紙かへりし中に花は枯れにし。

酒飲みのよい言ひ草や花見哉（以下觀櫻の宴）

「いゝ花」といつては杯一つ干し。

句どころの騒ぎではない花見哉

酔ふてから始めて思ふよい櫻

酔どれの三人出來て花見かな

酔ひ倒れ花に宿ると眠り聲

五、乘馬會平島温泉遠乘

泥人形春雨を衝いて二十余騎。

春雨に馬をつなぐや橋の下

春雨や馬を繋いで温泉にひたり

温泉や聞く春雨の音かすか。

隊長の鬚にしたゝる春の雨。

春雨や濡れてうれしき騎馬旅行。

春の水高綱落ちて濡れ佛（白川にて某君落馬す）

名殘の泥を落すやぬくい縁

六、落馬七題（乘馬會の或る日）

あの馬は質が悪いと起き上り。

落馬して「何アブミが」と眞面目顔

「痛くない」といひつゝ先生びつこひき

落馬して早や奥さんが持ち出され

落ちそうな時にはそつと鞍にぎり

落馬して着陸だとはよくいふた、

山高のソフトになつて落馬かな。

七、初夏雜詠

櫻花青葉と化して一里程（放水路にて）

木の綠草の綠が土手一里（全）

夕闇を一間ばかり螢かな。
夕涼み五六人もあり橋の上。
尺八もついで出て来る夕涼み。
夕涼み女の影や月朧。

茱萸の實の熟する頃

二三甲一 原 田

導

窓さきの赤き列みのぐみの實の

ひそひそゆるゝ夏近みかも

夕まけて故郷遠く懷ふ子は

茱萸の赤きも悲しかりけり

うつゝなく過ぎ來しゆねに熊本の

町の並木の今はこひしも

熊本町の並木の青桐を

黄にほこりして夏來にけらしも

わだつみの浪あをくど満ち來ごと

柿のみどり葉搖れ光る見ゆ

樂まぬ心わびしく見てあれば

チロロホロロと柿の花ちる

月見草咲く野に臥せばいづくゆか

風の來りていづくへか去る

たんぼぼの飛ぶよふいゝ歸るなく

友に別るゝ悲しからずや

人を知る事は悲しや人を知り

其の知る人どわかれんとする

さねかづらのちもあはんと誓ふれば

なかなかおしきわかれなりけり